

《特別寄稿》

## 本尊鈔三処四但(五但)の銘文

興隆 学林長

苺 谷 日 任

今日は本尊問題についてと思つて居たのですけれども、その基礎を為すべき本尊鈔のこと、本尊鈔の中でも忘れてはならない三ヶ処にある「五十余年」の銘文と、「但」の字がつく重要な個処について、所謂三処四但(更に一つを加えて三処五但とも云う)についてお話します。

執筆中の本宗綱要の方で、この頃本尊問題に入り、あと信行門を書けば本宗綱要は終了する段階に來ました。ところでだんぐとこれを書いて参りますと本尊に対する諸門流の考え方が随分間違っていると云う事に気がつきました。

一体日蓮大聖人は本尊鈔に於いて本尊とは何物であると説かれたでしょうか。若し日蓮大聖人が勝手に本尊を凶顯せられたとするならば、それを一切衆生に拜ませるなどと云う事は、日蓮大聖人の信仰を他に押つけることだと断せざるを得ません。如何にも日蓮大聖人がお書きなされたものには違いない、けれども日蓮大聖人門下各派にあつては、その本尊は現われている事実を、お書きなされたものだと云う事を忘れてゐる。最近大崎学報をのぞいてみました、それに依ると、日蓮宗の考え方は釈迦牟尼世尊を以て本尊とすると云う事に、大体一定しているようです。一

本尊鈔三処四但(五但)の銘文

本尊鈔三処四但（五但）の銘文

体釈迦牟尼世尊を本尊とするという事は、誰がきめたのでしょうか。若し釈尊自ら法華經を説かれるに当り、その法華經の中で私を本尊とせよ、拜めよ、私を拜んだらば功德をやる」と云うような事を説いたとしたら、それが仏教である」と承認出来るでしょうか。

釈迦牟尼世尊が法華經をお説きになられたのは、法華經に本尊があるんだと云う事を顕はされたのであり、日蓮大聖人はその本尊を顕されたのであつて、決して自分自ら勝手に書かれたものではない。本尊鈔は、その事をハッキリとお説きになられたものである。日女抄に「爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん、竜樹天親等天台妙楽等だにも顯はし給はざる大曼荼羅を末法二百余年のころ、はじめて法華弘通のはたじるしとして顯はし奉るなり、是全く日蓮が自作にあらず多宝塔中の大牟尼世尊分身の諸仏すしかたぎたる本尊也」、（縮一六二五）と仰せられた。その自作でない本尊を日蓮宗諸門流では釈迦牟尼世尊であるというけれど、釈尊自ら法を説き乍ら釈尊を本尊とせよと云う筈がない。従つて爾前迹門の經典が本尊を立てるについて、釈尊を本尊としないで、阿弥陀經を借りて西方に阿弥陀如来あり、又東方に薬師如来あり乃至三世十方の諸仏があるから、それらの諸仏を本尊とせよと仰せられたのである。華嚴經の大仏にしても釈迦牟尼仏は応身仏であつて、応身仏の上に報身の如来を示現して本尊を顕はされ、大日如来を本尊とする真言宗においても又同様に、釈尊がお説きになつた經典であり乍ら、而も大日如来を本尊とせよとおっしゃられた。これが仏教の常識と云うものである。そしてこれを指して、日蓮大聖人は開目鈔に、諸宗の学者は本尊に迷へり」と仰せられた。然るに今日、日蓮宗諸門流が本尊に迷うような事を仕出かしている。

以上前置きとして本題に入ります。先づ本尊鈔という御書は如何なる事を仰せられたかと云えば、今云つた様に、法華經の御本尊をハッキリされたものである。ところで法華經に、初重教相の法華經、第二重の法華經、第三重の法華

經と三種あつて、日蓮の法門は第三の法門なりと仰せになつたとおり、第三の法門たる本地本門八品即ち本地本門法華經を取るのである。教主釈尊の本尊はこの本地本門八品の法華經にしか顕われていない。此処で吾々の本尊は何物であるかと云う事を考える前に、釈尊の御本尊は何であつたかと云う事を考えなければならぬ。釈尊は本尊なくして仏になられたのであろうか。何物も拝まれずに仏になられたのだろうか。若しさうだとするならばそれは法身如来であつて、報身如来ではない。而も釈尊が無師独悟でなかつた事を主張するのが法華經の寿量品の骨頂である。無師独悟であるならば本尊はいらない。爾前迹門の教えは無師独悟であつて、師匠なしに仏に成ると云う迹中仏教であり垂迹仏教である。華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃とある法華經も、諸經は五味と云われる中に含まれて無師独悟であるから、これらを解脱仏教、印度の仏教と私は云つて居ります。これに対して日蓮大聖人が日本の仏教と仰せられたのは無師独悟ではなく、師匠につかえ、修行し、而して斯くの如き仏になつたという事を表わしている。それは既に法華經提婆品にその片鱗がうかがえる。即ち「時に仙人あり來つて王に白して言さく、我大乘を有てり妙法蓮華經と名づけたてまつる。若し我に違はずんば當に為に宣説すべし。王、仙の言を聞いて歡喜踊躍し、即ち仙人に隨つて所須を供給し、果を採り水を汲み薪を拾ひ食を設け、乃至身を以て牀座と作せり」と、法華經の法華經たる所以は、釈尊の師匠は誰であり、釈尊の習われた仏教はどんな仏教であり、釈尊の修行された仏教は如何なる仏教であつたかと云う事を明されたところにある。法華經涌出品に如何なる師についてこの四大菩薩は学ばせ給うか、如何なる仏法を御修行になされたのか、今何をしておいでになるか等と、略開近顯遠を明して釈尊の物語り、過去五百塵点の昔の本因妙の物語りをして、寿量品に來つては広開近顯遠を説かれてある。即ち、法華經という經典が顯はしたところの釈尊の御修行はどうであつたか、拝まれた御本尊は如何なるものであるかと云えば、それは本門三大秘法と云うものであつて、そ

本尊鈔三処四但(五但)の銘文

これは本尊鈔に、「斯くの如き本尊は在世五十余年に之れなし但八品に限る」とおつしやつておられる事以外にはありません。

前述の大崎学報の中に、日蓮大聖人の平常拜まれた御本尊はどんな御本尊であつたろうかという事を御遺文から研究されてあるが、その発表の中では、日蓮大聖人は法華経を御本尊とされ、亦海中出現の隨身仏たる釈尊像をおまつりになつたんだらうと云う様な事を云つて、十界勧請の御本尊はおまつりになつたと云う様な事は一言も触れていない。これは、御本尊の拜み方が足りないんだと私は思う。宗祖御奠定の御本尊を宗祖が勝手に造りになつたものだと思つているから、「法華経の御宝前に供えまいらせて候」「釈迦牟尼世尊の御宝前に供えまいらせて候」と云う御文を拜見して、宗祖は唯法華経八卷二十八品、或は釈尊像を御本尊となされたのだと云う風に考へている訳です。宗祖は御自身の御図頭なされた御本尊をば御信者には御本尊とせよと云つてお渡しになりながら、御自身自らこの御本尊をどうして拜まれなかつたでしょうか、拜られない訳がないでしょう。拜まれた証拠に法華経を本尊とすると仰せられたのであつて、法華経の御本尊と云うのは、実にこの大曼荼羅を指すのである。それを法華経の御本尊でないなどと思つているから、十界勧請の曼荼羅を祭られなかつたと云う事になるのである。又日蓮大聖人が自ら勝手にお書きになられた御本尊であつたなら、日蓮大聖人は拜まれる筈はない。自分が勝手にこしらえて、自分が勝手に拜んで何の利益がありますか。本尊問答鈔に「上に挙ぐる所の本尊は、釈迦、多宝、十方の諸仏の御本尊、法華経の行者の正意也。」とありますように釈尊、多宝仏、十方三世の諸仏の御本尊をば、法華経の本地本門八品で頭はされたのである。だから正しく輪円具足の大曼荼羅の御本尊、即ち宗祖御図頭の御本尊こそ、法華経の御本尊なので、それ以外に法華経の御本尊はありません。

次に本尊鈔に「夫れ始め寂滅道場花藏世界より沙羅林に終るまで、五十余年の間、華藏、密嚴、三變、四見等の三土、四土は皆成劫の上の無常土に変化せる所の方便、実報、寂光、安養、淨瑠璃、密嚴等也、能變の教主涅槃に入れば所變の諸仏随つて滅尽す。」と、おっしゃつておられる。此処に五十余年が出て来る。これが三処の銘文の中の第一である。教主釈尊の御本尊は何物かという事を顯はすのが未曾有である。未曾有の大曼荼羅という時、何が未曾有であるか考えて下さい。吾々を教える本尊であつたら、沢山そこらにころがつている。単に吾々末法の衆生を教えるだけの本尊であるなら何も未曾有ではない。何物でも拜むことにより本尊となる。いわば鰯の頭も信心したら御威光が出るというのと一緒である。何が未曾有かと云えば釈尊の拜まれた本尊が未曾有である。釈尊が本尊とされた本尊でなければならぬ。釈尊は經文に「我れと異なる事なからしむ」とおっしゃつてある。我れと異なる事なからしむる仏にするには、我れと異なる事のない本尊を授けなければならぬ。釈尊の本尊は何物であつたかという事が徹底してから、吾々の成仏の本尊が徹底するのである。これは私が勝手に云うのでなければ、日蓮大聖人も勝手に仰せられたのではない。經文に分明である。迹中の仏教においては、衆生の本尊は説くけれども能化の仏の本尊は何処にも説いてない。未だ曾て無いんです。この未曾有を証明するものが五百塵点久遠の師匠である。五百塵点の師匠はどなたですかと云う事を証明する為に、垂迹を破つて本地を顯はさなければならぬ。それがこの第一の銘文に顯はれている。即ち五十余年の垂迹仏教を悉く破してしまひ、その次に、「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なり」と云つて本地を顯はされている。これが本宗の本迹勝劣である。これを本迹一致だと云おうとするのは無理です。垂迹を破さなければ本地は出て来ない。この本迹の勝劣を取捨の勝劣というのである。

次に第二は「是の如き本尊は在世五十余年に之れなし」とある。第三の五十余年の文は、「過去の大通仏の法華經より

本尊鈔三処四但（五但）の銘文

乃至現在の華嚴經乃至迹門十四品涅槃經等の一代五十余年の諸經、十方三世諸仏の微塵の経々は、皆寿量品の序分なり。」と云つておられるところである。本尊鈔では以上の三処の銘文によつて、本地と垂迹とがハッキリきまる訳です。即ち本尊の土台がきまる訳です。それをば日蓮宗の学者の本尊鈔の講義をみると、みな「言惣意別」と書いてある。言葉は惣じて五十余年と云うけれども本当の意味は別である。即ち、八ヶ年の間にも但八品に限ると八年をとり出してあるから、四十余年の意味であると云うのです。若しそうだとするならば、上述の本地と垂迹とを分けられたその在世五十余年はどういう事になるでしょう。この場合は御文の通り五十余年と読まなければならぬでしょう。若しこゝも四十余年であるとすれば忽ちに御文に支障を生じて来ます。即ち「始め寂滅道場華嚴世界より沙羅林に終るまで」と五十余年の説法全体が入つている。こゝの五十余年は四十余年の事ではないと云うなら、何うして三ヶ処も同じ五十余年と書かれているのだろうか。古い説では、五十余年というのは宗祖の書き誤りであつただろうと云うのがある。乍然、日蓮大聖人が一期の大事と仰せられた本尊鈔をお書きなさるに書き間違ひなどあるべき筈がない。五十余年と書かねばならないから五十余年とお書きになつたのである。

過去大通仏の法華經より……一代五十余年、とある五十余年は、最初のものが存世の一代五十余年であつたのに対して、これは三世に亘る五十余年です。そしてこの三世に亘る三世仏教の一代五十余年の微塵の経々は皆寿量品の序分だといつて正宗を顯はし、一品二半よりの外は邪教、未得道教、久遠を覆くして説かざる故に覆相教であると打ち破つておいでになつてゐる。久遠というのは釈尊が古いと云うだけではない。久遠実成の本仏許りが久遠実成だと思つてゐるが、本仏という事は報身本仏であつて、報身本仏とは修行して仏に成つたと云う事である。故に久遠を覆しておるから仏にならないという事は、修行がハッキリしていないという事であり、教主釈尊の本尊が明確でなく、戒

坦も題目も明確でないという事である。本尊にしても、戒坦にしても題目にしても吾々だけの本尊や戒坦や題目では駄目であつて、吾々に戒を持つてという釈尊がどのような戒を持たれたのがわからずに、吾々は何故に戒を持たなければならぬのですか。そこですよ、是名持戒と云い、信心戒を持つてとおっしゃられたのは、この信心戒は釈尊が持つた信心戒であるから、「是名持戒行頭陀者」とおっしゃつておられる。釈尊が持たずに吾々に許り持つてとは不都合千萬な事になる。教主釈尊は本当に慈悲がありあそばされるからこそ是名持戒と云つて、自分が信心をした、持戒をしたのだからお前たちにも信心戒を持つて貰いたい。言い換えれば自分がお題目を唱えたんだから、お前たちもお題目を唱えて貰いたいと云う事である。

仏の説法が五十余年である事は法華経が証明して居り、何れの仏も必ず五十余年の説法を華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃と次第して説くのである。法華経方便品に、「諸仏同道」とあるのはこの事であり、仏の説法の規格である。阿弥陀如来にしても又一切の諸仏にしても悉く釈尊の如くに五時次第して説くのである。而るに諸仏同道、各修各行と同じではあるけれども、何れかに首頭取る仏がなくてはならない。各修各行では本當の統一は取れないが、そこには嚴然と能所勝劣の規律があつて、それを頭はずのがこの本尊鈔の三処の銘文である。若しこの三処の銘文が無かつたならば、本尊鈔における本地垂迹の區別は立たない事になってしまう。

要するに、過去の在世五十余年、現在の五十余年、未來の五十余年、斯くの如き五十余年の経々には久遠を説かず、教主釈尊の三大秘法を説かないから、未得道教であり覆相教であつて、これは打ち破つてしまはなければならぬ。打ち破つて頭はされたのが本門八品であり、この本門八品を頭はずのが四但の法門である。

日隆聖人は此の五十余年をどうおっしゃつて居られるであらうか。

本尊鈔三処四但（五但）の銘文

在世五十余年に之れ無し、と云うとき一切の爾前諸経四十余年と八年の法華経まで入れて一代五十余年を垂迹だとするならば、八ヶ年の間にも但八品に限ると仰せられた八ヶ年はどういふ事かという反問が出て来る。その時は垂迹の仏教に五十余年の説法があるから、本地にも五十余年の説法がなければならぬ事を証明しなければならぬ。「本には迹の徳あり、迹には本の徳なし」と、日隆上人に至る所でおっしゃって居られる。本地に垂迹が含まれ、本地の中から垂迹が出たのであるから垂迹の功德、功用と云うものは本地の中にある。故に垂迹の五十余年は本地の中から出たものであり、八ヶ年の間とある八ヶ年は本地の五十余年の中の八ヶ年である。

日隆聖人は弘経抄（日隆聖人全集第五卷二四頁）に、「此の上に五味主過去常根本一乗の法華経之れあり、此れに依て日蓮宗を立つ、此の本地一妙の五味主より、従本垂迹する迹々の五義之れあり」と、おっしゃっておられる。五味主と云うのは南無妙法蓮華経、過去常とは本門八品である。この五味主の中に過去常があり、過去常を顕はして過去久遠実成の釈尊の三大秘法を顕はした本門八品がある。それが本門八品の法華経であり、それによって法華宗が成り立っているのだと云う、従つてこの本地の一妙、妙法蓮華経の五味主の中に明らかに本門八品が入つて居り、本門八品の中に華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃の五時の諸経が備つて居るのである。又、開迹顯本宗要集第一卷四三七頁に、「本門法華宗の義に云く、本門と云う本は一切万法の根本根源と云う事なり。根本には必ず諸の枝末の功德を具する故に、迹中一切諸法の功德を本地に悉く具足して円融相即する故に一乘なり、一本なり、故に本は従多帰一して一妙高広なり。故に淨穢土の諸仏を開会して本地の一仏釈尊と成じ、迹中淨穢土の諸九界の諸菩薩を会して本化上行等の菩薩と成し、迹中淨穢土の諸仏所説の諸の五時八教の方法を会して、久遠の淨穢一体の本地甚深の妙法蓮華経を成ず」とおっしゃっておられる。即ち妙法蓮華経の五字の中に本門八品があり、本門八品の中に宛然として明



らかに華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃の本地の五十余年、五時の経説があつたという事が此処にハッキリとされている。従つて、宗祖の御妙判本尊顕発の時に新尼抄の如く、「今此の御本尊は、教主釈尊五百塵点劫より心中にをさめさせ給いて、世に出現せさせ給いても四十余年、其後又法華経の中にも述門はせすぎて宝塔品より事をこりて云云」と仰せられています。斯様な時の御文は必ず本地の在世五十余年ではないかと拝見しなければ、即ち本地の五十余年の中の四十余年、本地五十余年の内の法華経述門をはせすぎると拝見しなかつたなら本尊鈔の在世五十余年の文と違つてしまい、会通がつかなくなる。それなのに諸門流では言惣意別の説を振り廻して、本地本門八品に説き顯はされた八品の本尊は儀相である。型式である。在世の本尊である。と放つてしまい、自分の見解を以て、宗祖の御本尊を在世の御本尊としている。これは大きな謗法である。日隆聖人は四帖抄（法華天台両宗勝劣抄一六四頁）に、「本門、本尊、永異諸経云故、本門八品外、在世五十余年、与滅後正像二時未出現先代未聞、本尊也、此、本尊、所謂南無妙法蓮華経是也」と、在世五十余年の外なる本尊である事をハッキリ御指南せられている。

日隆聖人の御指南では在世四十余年とおっしゃる所が多いけれどその四十余年は本地の四十余年を指すのである。だから本尊鈔の御科文を拜見しても在世の経文に約してという事を云つておられる。在世と云うのに本地の在世と、迹中の在世と二つある事を考えて御文段を拜見しなければならない。

本尊鈔では日隆聖人の御文段に依ると南無妙法蓮華経の本尊が釈尊の本尊であり、それを顕はされたのが略明と広明の二段になっている。日隆聖人分科主要御書一〇七頁に、

大文第二 末法相応本門事行観心の能撰南無妙法蓮華経と御科文をかけ、その第一に、

本尊鈔三処四但（五但）の銘文

本尊鈔三処四但（五但）の銘文

第一 略して釈尊所説の教時に依て一念三千の出所を顕はし畢つて本門能摂事具三千上行伝付の本尊を以て在世滅後の亀鏡に備ふることを明す

と、この一段が略明の一段である。次いで広明の一段は五重三段を立てて妙法蓮華經を本尊とすると云う事を説かれる第二 広く一代諸經の三段に經て権実を簡び本迹を分ち終に本門八品上行要付の本尊を顕はして末代愚人の易行を勸むることを明す

とある。これが広明の一段である。本尊鈔では妙法蓮華經を本尊とされているが、その妙法蓮華經を顕はされるについて御文段は略明と広明になっている。略明の結文は、

是の如の本尊は在世五十余年に之れ無し（本地の）八年の間但八品に限る。

とあり、広明の結論は

在世の本門と末法の初めは一同に純円なり、但し彼れは脱此れは種なり、彼は一品二半此は但題目の五字也。

とある。彼は脱、一品二半、一念三千、此は種、本門八品、題目の五字と云つて、妙法蓮華經の五字で広明の一段を結んでいる。

此の法体に約してある種脱の法門を日蓮宗諸門流は、機に約する法門だと云う。田中智学氏は、種・熟・脱と云う法門は法体の上では論じない。それは法体とは南無妙法蓮華經であつて、南無妙法蓮華經の上では種脱の相違がないからと云うのです。そして種脱を云うのは約機の法門であつて、即ち教・機・時・因・教法流布の前後の五綱の上では機に約するものであると云うのです、ところが日隆聖人は「彼は脱此は種なり……此は但題目の五字」と云う所を上行所伝の題目を顯はすと云つて居られるから、これは法体でなければならぬ。機根に種脱があるならばそれを教える法の上に

も種脱がなければならぬ事になる。法機相応するのが本当です。

故に吾々の修行の本尊とすべきは、本地報身本仏釈尊の修行せられた本尊でなくてはならない訳であり、その為に五十余年の三処の銘文を以て本地垂迹をハッキリさせるのである。

垂迹の一切の仏教を破つてのち本地が顕はれるから、今本時と云う御妙判がある訳です。破してのちにそれを放つておいたならば通仏教になつてしまふ。

法華経と爾前経と、どの点が相違するかと云えば、破するのは爾前経においても破する場合があるけれど、会通によつてその相違が決まる。本門の一品二半を以て垂迹仏教、五十余年の仏教悉くを打ち破つて、あとで顕はれて来るのが八品である。そこで八品はどんな役をつとめるかと云うと、能開、能撰と云う役目を果すのである。だから本尊鈔にも「一品二半よりの外は未得道教邪見教覆相教と名づく」とあつて一品二半で一代五十余年三世微塵の経々を破り、そのあとで「本門を以てこれを論ずれば本門は一向序正流通の三段共に末法の為なり」と云つて、迹門を本門の体内に撰めて居る。その時この前立ち一品二半は、本地本門正宗一品二半に撰まる。

本門には能開の功德があり、本門の体内に所開の迹門があると云う事を本尊鈔にお示しになっている。「その本尊の為体塔中妙法蓮華経左右には釈迦牟尼仏、釈尊の脇士には上行等の四菩薩」と仰せられて本地の本因本果の十界をお明しになつて、文殊普賢薬王等を以て迹中の所開の迹門の意と御文段なされて、迹中の仏法の十界をお顕しになつた。つまり体内に撰めて能所勝劣を明確にするのが本門八品の立場である。種熟脱三益の上から云えば、末法は下種に限るけれども下種から熟が生れて来、熟から脱が出て来た故に、悉く種子に撰まるのであると云う法門が、日隆聖人尼崎門流の下種総在の法門と云うのである。下種の中に悉く種熟脱の三益を撰むのである。日隆聖人は法体の三益

本尊鈔三処四但（五但）の銘文

と機の三益と二つあると云つて、私新抄の中で、「機を法体に摂める」と盛んにおつしやつて居られる。爾前権教は法を機に摂するから聴き手に依らなければ御利益は無く、所被の機に依らなければ能被の仏法は如何に尊くとも役に立たないと云う事になる。本地本門は種熟脱の三益の機を下種の法体に摂めて其の下種の法体とは妙法蓮華經である。だから、如何なる機根でも、信者誘者が南無妙法蓮華經に触れたら利益を蒙るのである。

次に四但に移ります。先づ但と云う言葉は他と簡ぶと云う事であつて、簡に二義がある。即ち簡取と簡捨とであるがこの四但の場合の但は簡取の意である。

この但の文は略明の所に二つある。第一但は、本地涌千界を召して八品を説いて之を付属し給う。と、これによつて本門八品が定まる。次に第二但は、

是の如き本尊は在世五十余年に之れ無し、八年の間但八品に限る。

これも但八品と、即ちこの略明の一段における第一但、第二但は、本地の法華經とは八品であるという事を定められた但と云う事になる。次に第三但は、広明の一段にある。

在世の本門と末法の初は一同に純円なり、但し彼は脱此は種也、

彼は一品二半此は但題目の五字

と、この御文は、影略互顯である。彼は一品二半と云うのは脱を顯はず經典であつて、続いてこれは但題目の五字とあるが、これはその間の經典を略しているのである。即ち彼は一品二半とあるから次は種子下種を説いた經典たる本門八品としなければならぬ所である。それは能詮の經と所詮の法体と云うものは何時も幽蓋相応するものでなければならぬからである。だから影略互顯せられたのである。

次の第四但はこれは八品を示されたのであります。我が弟子之を惟へ、地涌千界は教主釈尊の初発心の弟子也、寂滅道場にも来らず雙林最後にも訪はず不孝の失之れ有り、迹門十四品にも来らず本門の六品には座を立ち、但八品の間に来還せり是の如き高貴の大菩薩三仏に約足して之を受持す。末法の初に出でざるべきか

と、但だ八品の間に来還せりと、人の上から云つても付嘱された上行菩薩は八品の間にしか出て来ないという事を顯はしている。斯くの如く四但によつて付嘱された上行菩薩は本門の八品の間に、付嘱した妙法蓮華經も但八品に限る事がハッキリしました。

実は四但の法門という事は私の学生時代に清水梁山という日蓮宗の学者が、寿命品の肝心南無妙法蓮華經を主張して本門八品を云わなかつたけれど、四但の法門というものを教えて呉れたので、その法門にヒントを得て四但の法門を確立した次第です。

次に私はもう一つ第五但を付け加えて、三処五但の法門と名づけたいと思う。

今末法の初め小を以て大を打ち権を破し東西共に之を失し天地顛倒せり、迹化の四依は隠れて現前せず、諸天其國を棄て之を守護せず、此時地涌の菩薩始めて世に出現し、但だ妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ、因謗墮惡必因得益とは是也。

とある。これが第五但です。日蓮大聖人もこの御文をお書きになられて、日本の仏法西へ行くなりと感興遊ばした事と思ひます。日本の仏法とは総名南無妙法蓮華經を中心とする事であつて、天台伝教三国流転せる仏教、法華經は諸法実相一念三千の悟りを中心とするものであつて、これを日隆聖人は本門に開会して別体の妙法蓮華經とおっしゃつて居られる。この別体の南無妙法蓮華經と總体の南無妙法蓮華經を諸門流では少しもわきまえていない。以要言之の要

本尊鈔三処四但（五但）の銘文

言の四字を放つてしまい、如来一切所有之法という法を中心として、名体宗用教の五玄を説くために、総要が何処かへ行ってしまう。要言の法とは以要言之の妙法である。以要言之の妙法の中に名体宗用教五重玄義が宣示顯説されているのである。妙法蓮華經に総別があり、三大秘法に総別があり、本尊にも総別がある。「総別少しも違いぬれば成仏思いもよらず、六道輪廻のもとになり」と曾谷鈔にハッキリおっしゃって居られる事を忘れてはならない。

御文中に「因謗墮惡、必因得益」とは、せめては、そしらせてでも仏因を植えなければならないと云う事であつてこれが当宗の折伏の根元である。何故法華宗は折伏をするのかと云えば、放つておいても地獄に墮ちる未下種の衆生許りであるからせめては法華經をそしらせて地獄におとすのだ、そうすると、不輕品の如く仏因得益で、必ず成仏の仏種が芽えて来て信心成仏をする時が現はれるという事である。「上行菩薩出現して幼稚に服せしむ」という幼稚は信者許りではない。有名な「五字の内に此の珠を裏み末代幼稚の頸に懸けさしむ」の文の幼稚を信者許りだと我々は永い間そう思つて居た。勿論信者に唱えさす為のお題目である事は云うまでもありません。乍然もう一つ信者でない謗法者の首へ懸けさしむる題目でもある事を知らなければならぬ。その証拠が此処のところである。この「因謗墮惡必因得益」（そしる事によつて惡道に墮ちるけれども必ず益を得る）のだから幼稚の中には信者不信者共に含まれる。本門三大秘法の題目は信者許りの唱える題目ではない、これが折伏論の根本である。提婆達多品の提婆は釈尊に帰依したのではない、題目を唱えたのではない、ただ聞かされただけである。そしてその為に地獄へ墮ち、而も天王如来となつたではないか、凡そ宗教の中で謗する者は罪であると云うのが原則である。それは云うまでもない。しかし罪の者が成仏すると云う事を説いた經典が何処にあるでしょうか。本門の戒坦は信者許りが集まるだけの戒坦ではない、悪口雜言する人までも參る所の戒坦である。従つて日隆聖人は戒坦に在世、滅後の不同ありと仰せられた。即ち

在世の戒壇は信者許りの戒壇であり、滅後の本門の戒壇は本地本門八品であつて、釈尊が修行せられた戒壇は信誦共に聞法下種せしめられ、信心下種せしめられ、唱題下種せしめらるる下種の戒壇である事を示している。宗門の制度はそういう構成を持つようにならなければならぬ。現在の宗門の組織は信者御用の御宗旨と云える。信者が無かつたならば法は伝はらない。これだけでは日蓮大聖人の御本義にかないません。謗者多き世の中であるから、それにかなく謗者にも呼びかける組織を持たなければならぬ。

信者はもとより逆謗の衆生の為の三大秘法である事を忘れてはならない。全世界中の宗教は謗る者は罪であると説くけれども、その謗る罪によつて成仏の仏種が植えられるのだと説く宗教經典が本門八品の不輕品以外に在るだろうか。これ程立派な宗教に徹した仏教を僅か千年にも満たない六百年か七百年で失つてしまふ事があつたら、それは全人類の文化の上で最も尊いものを失うという悲しい事になるだろう。どうぞ折伏の根本義を此処においてやつて戴きたい。この大切な本地本門法華經の御本尊をば先にも云つたように、只宗祖日蓮大聖人が感得せられて御函顯なされた御本尊だと思つている諸門流は、八品の本尊は在世の本尊だと軽く思う事になつてしまふ。書かれた姿は八品の様相に抛られたけれども肝心の魂は四十五字の法体であると云つて、一念三千を妙法蓮華經の法体だとしてしまふ。それは別体の妙法蓮華經であつて決して上行に所伝された題目ではないのである。日蓮大聖人が開目鈔に「一念三千こそ仏に成る種とみゆれ」とおっしゃられたその一念三千は、妙法蓮華經の中に撰められた本門八品上行所伝の総名体内の一念三千である。故に本尊鈔の御科文は、始めに体内理具一念三千を挙げ、次に体内事具一念三千を挙げ、最後に上行所伝の妙法蓮華經をお挙げになつて居られる。斯様な本地本門八品の本尊を、在世迹中の四十余年と肩を並べる所の法華と同じようにしていると云う事は日蓮宗の滅亡である。本門とは根本と云う事であり、根本とは本地と云う事

本尊鈔三処（四但）五但の銘文

である。本地とは下種と云う事であつて、種子の中に一切が撰まれているのである。

以上三処四但（五但）の銘文に就いてお話ししました。要するに三処の五十余年に依つて、明らかに本地が現われ四但によりて本地本門八品が明になり、第五但の文に依つて逆謗下種の三大秘法、別して本門の本尊が顯われるのである。

就いては此の法華宗の組織の上にそうした逆謗下種の三大秘法を活用する組織を持つと云う事は、何よりも大切な事である。どうぞ諸君に送られたところの大事業です、その実現に努力を傾注される事を切望する次第です。南無妙法蓮華經

昭和三五年七月二十七日